茫然忘

藤本義一

笑い鬼

女詐欺師物語

藤本義一

実業之日本社

笑い兎

昭和六十一年五月二十五日　初版発行

著者　藤本義一

発行者　増田義和

発行所　実業之日本社
本社　東京都中央区銀座一―三―九
電話　〇三（五六二）二〇五一（編集）
〇三（五三五）四四四一（販売）
振替　東京一―三二六
支局　〒一〇四
大阪市北区曽根崎二―十二―七
梅田第一ビル内
電話　〇六（三一二）一五七三

印刷所　大日本印刷株式会社

製本所　共文堂

乱丁、落丁の場合はお取り替えいたします

ISBN4―408―53068―9
© G. Fujimoto Printed in Japan

目次

泣き兎　5
笑い兎　67
濡れ兎　111
流れ兎　155
淫(みだ)ら兎　197
跳(と)び兎　241

カバー絵／村上　豊

装幀／安彦勝博

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

笑い兎

泣き兎

一

目の前で、荒い吐く息を繰り返している女を、麦子は、母と呼べばいいのか、それとも祖母と呼べばいいのかと迷っていた。

戸籍の上では〝母〟になっている。

――田沢ヤスエ。

明治三十七年二月五日出生、出生届出時の住所は、京都市上京区北白川西町八五番地となっている。

――長女・田沢麦子。

昭和三十三年六月三十日出生、出生届出時の住所は大阪市西成区千本通一丁目二六番地である。

ヤスエは結婚していない。すると、麦子はヤスエの私生児ということになるが、これはおかしい。ヤスエは麦子を五十三か、五十四の時に生んだことになる。

麦子は、大阪市の中学を卒業して、繊維問屋の事務員になる時、はじめて戸籍謄本というものを見た。明治三十七年と昭和三十三年という隔りの大きさに、その時、はじめて気付いた。それまで、ヤスエから、明治三十七年の辰年生れだということは、何度も聞いていたが、疑ったことがなかった。むしろ、疑ったのは、自分に父親が何故いないのかということだった。

「あんたのお父ちゃんは、南方戦線で戦死しはったんや」

六十代のヤスエは、まったく辻褄の合わないことをいったものだ。昭和三十三年生れの麦子の父が、どうして戦死したことになるのか、ヤスエは、生活の場では、平気で嘘とわかる嘘を口にした。

それも六十の半ばを過ぎる頃から嘘の技術が下手になってきた。小学生の麦子にも見破られる嘘を口にした。たとえば、高い利子を産むと称して、隣り近所の主婦たちから臍繰りを吐き出させようとするのだが、あまり大法螺を吹くために、相手に警戒心を起させたものだ。

「あたしのごく近い知り合いに、男爵はんがいてはりますのや。男爵というのは、ようご存知でっしゃろ。明治の功臣は、伯爵、子爵、男爵となったわけでおまして、その男爵はんは、お名前を申し上げたら、何方でも、あッと愕きはるお方だす。なんしろ、明治維新の時に、お上から、金一封というて一万円貰いはった方で、現在でいうと一億円以上の値打だす。この男爵はんは、男爵の中でも、位の高い庶流でおまして、並居る男爵はんの頭に立つような方ですのや。庶流ちゅうのは、下々のあたしたちからいうと分家に当ります。その男爵はんが、今度、京都で事業を起しはりますのや。ついては、あんたも出資しはったら、一年で出資金の三倍が手許に転がり込みます。それも、最低三倍でおまっせ……」

こんな言葉に釣られる主婦や商店主はいなかった。

ヤスエの饒舌は、惚れぼれするくらいで劣えをみせていなかったが、その言葉の内容が、空虚で時代遅れだということに彼女は気付いていなかった。

「おかしいなあ。今時の奥さんは、要慎深いのかいなあ。それとも臍繰りを持ってえへんのやないかなあ」

ヤスエは麦子の前で零したものだ。

その頃から、ヤスエに脳軟化症の兆候が生じはじめていたように麦子は思う。

ヤスエの吐く息は、その間隔が不規則になってきた。

麦子は、息をころして、ヤスエを凝視した。ヤスエの顔の造作は大きい。目も鼻も口も大きい。耳朶も米粒が乗ると自慢しただけあって、肉の厚みがある。白髪を後に一束にしてあるので、秀でた額にも艶があり、安らかな午睡を楽しんでいる御隠居といった感じで、これが死期の近付いた人とは思われない。

幼い頃、麦子は、ヤスエが贋作の浮世絵を売っていたのを記憶している。奈良の方の旧家に、桐の箱に入った掛軸を売りに行った。麦子にも一張羅の服を着せ、自身も借り衣裳の上品な着物姿だった。髪も上品に結っていた。五十歳を過ぎても、ヤスエの肌は水々しい潤いを失っていなかった。旧家の奥座敷で、ヤスエは上品な口調で、自分の家が没落し、これが唯一の父の遺産なので手離したくないといいながら、涙を湛えたものだ。

「骨董屋に持ち込んで、値をたたかれた挙句に、見知らぬ人に売られると思うただけでも、死んだ父に申し訳がないような気がしましてからに……」

涙が一滴、彼女の膝に落ちかかるのを、麦子は素早く小さく折りたたんだ花柄のハンカチで防いでやった。

この動作は、ヤスエが詐欺を演じる時、麦子に命じられた役割であった。

この祖母と孫の呼吸の合った小さな連携プレーに、相手方は、他愛もなく引っかかった。麦子から見ても、面白いほどだった。

「な、麦ちゃん、女はな、なにが武器かちゅうたら、愛嬌でもなんでもあらへんのや。それは、涙、そうやで。憶えときや」

これが口癖だった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「女の涙は、男も動かすし、女も動かすのや」
これがヤスエの中に植え付けられた人生哲学だった。
欺される相手は、ころっとヤスエの方に靡いてきたものだ。
奈良の時も、そうだった。
床の間を背に恬然と座った老人は、掛軸の絵を見ながら、頷いたものだ。
「これは、菱川派のもんに違いないな」
菱川派の描いた浮世絵の花魁の顔がヤスエと似ていると麦子は思ったものだ。
まんまと舌先三寸で売り捌いた後のヤスエは、その心の躍り具合を軽快な足取に見せたものだった。
月明りの畦道を大股に歩くヤスエに、幼い麦子は小走りに従わなくてはならなかった。
「おかあちゃん、もっと、ゆっくりと歩きいな」
麦子が声をかけて、ヤスエは麦子のいたことに気付いたように立止り、笑顔で振り返った。
「うまいことといったなあ。これで当分贅沢が出来るで、麦ちゃん……」
そんなヤスエを麦子は拒もうとはしなかった。むしろ、ヤスエの歓びと同じ歓びをもって、笑顔を返したものだ。ものごころついた頃から、麦子はヤスエと詐欺行脚を共にして、生きていくということは、他人を騙すもの也と身に浸みていた。
「あ、緊張してたさかいに、小便するのを忘れてたわ」
ヤスエは、派手に着物の裾をまくりあげ、畦道で中腰になり放尿した。月明りの中で、白い飛沫が派手に地面を叩いた。

放尿しながら、袂から手探り出したチリ紙を揉んでいる。
麦子は、そのヤスエに、自信に満ちた母の姿を見るような気がした。
この後、ヤスエは、それまで住んでいた西成区のアパートの部屋を引き払って、麦子を連れて全国を歩きまわった。
「麦ちゃんもしっかり歩けるようになったし、宿で一人でいてても泣かへんようになったさかいにな。それにな、今、稼いでおかんといかんのや。麦ちゃんが小学校に上るようになって、あっちこっちと歩きまわっていたら、学校に行けんようになるやろ」
麦子が不就学児童になるのが可哀相だという。その考えは、どうやら、ヤスエ自身の子供時代を思い合わせての発想らしかった。
鳥取の廓下が軋みをあげる安宿で、五右衛門風呂に入りながら、麦子が訊ねたことがある。
「おかあちゃんは、学校へ行かへんかったんか」
「行きたかったんやけども、行けんかったんや。おとうちゃんがな、旅から旅への巡業でな、行く暇がなかったんや。おかあちゃんは旅先で死んでしもうたしな……」
麦子は、祖父が浪曲師だと知ったのは、この時だった。後にも前にも、ヤスエ自身の口から過去を聞いたのは、これだけだった。ヤスエ自身が、何処でどんな生活をしてきたかを一切、口にしなかった。麦子もまた、聞こうとはしなかった。毎日が初めての土地であり、毎日が初めての宿だった。せいぜい二日がひとつの宿の逗留期限だった。そして、ヤスエは、宿に着くと、次に向う土地と綿密な連絡をとっていた。その電話は、麦子には容易に理解出来ない符牒の連続だった。テキ屋

その裡に、麦子にも朧気ながら、いくつかの隠語が理解出来るようになった。モノタンは反物であり、ハボクは植木といった具合で、啖呵売は口上を並べて品物を売ることで、ミンサイは催眠術のことだと知った。

旅に出て一年ばかりは、麦子は楽しくてたまらなかった。なにしろ、行く先々には、祭礼が待ち受けていたり、夜店の灯が点々と並んでいた。

ヤスエの役は、買い手に化けて、客を釣り上げるのだ。俗にいうサクラである。地元の人間がサクラになることは出来ない。そこでヤスエが起用されることになる。

時には、テキ屋の売り手と派手な口喧嘩を演じることもあった。

「一寸、兄さん、この布地は縁だけ純毛で、中は、偽物やないやろな」

ヤスエは鉄火な口調で食ってかかる。

「よういうな。お客さん、そんだけ疑うんやったら、買うてもらわんかて結構や。一寸、こっちに貸してんか。わしが証明してみよやないか」

男は反物を奪って、先ず縁の繊維を抜いて火を点ける。すると、安物のライターの焔の先で、糸は純毛独特の獣くさい臭気を放ちながら、くるくると小さな火玉をつくる。

「さ、このあたりも一本抜いてみよか」

男は、布地の真ん中の繊維を抜いて、火を点ける。これも臭気を漂わせて火玉をつくる。麦子は、その二本目の糸が、男の掌の中から巧妙に指先に繰り出されたのを見抜いている。布地の縁だけが、真物なのだ。

ヤスエが納得した面持で買うと、客は次々と買う。それは、一本の釣糸にいくつもの釣針が仕掛

けられたような鮮かさだと麦子は思う。
品物の売れた歩合をヤスエは貰うわけだ。
祭にも夜店にも、麦子は浴衣を着せられたものだ。赤い金魚の柄と紺の兎の柄があった。それを着て、ヤスエが偽客を演じている間、金魚掬いをやったりしたものだ。
「この兎はな、泣き兎やで……」
下関の宿で、浴衣を畳みながら、ヤスエが呟くようにいったことがある。
「なんやの、泣き兎て……」
麦子が聞きとがめていうと、ヤスエは照れくさそうにわらってみせ、
「あんなあ、女は兎みたいなもんや。兎ちゅう動物は、動物の中で、一番に助平なんや。そやさかいにな、男を知ったらあかん。男に騙されてしまう。麦ちゃんもな、男に騙されたらあかんでえ。とことん男を騙さないかんのや」
といったものだ。幼い麦子は、男と女の関係といったものは、無縁のものだったし、理解出来るものではなかった。それでも、ヤスエが大人に語る口調でいうのを聞いていると、麦子は、ヤスエの言分がなんとなくわかるような気がした。兎の耳は長い。男が、その長い耳を、むんずと摑む。その時、兎は悲しい泣き声をあげるしかない。四肢をばたつかせて抵抗してみても、それは哀れな足掻きでしかないとヤスエが語りかけているのがわかった。そんな兎になってはいけないと語りかけているのだ。
「そやから、泣き兎になった方がええ。はじめからな、泣いて男を騙すんやがな。男ちゅうのは、女の涙に弱いもんや。泣き兎ちゅうのは、芝居で泣いてみせて、後で舌を出すのや。お妾さんは、

みな、泣き兎やで。というて、おかあちゃんは、麦ちゃんに、お妾さんになれというてんのやない。あれほどな哀れな人生はない。それよりは、お女郎になった方が正直やというてんのやで……」

ヤスエは、こういうことを話す時、幼い麦子を自分と同年齢だと思っている節があった。麦子の方も、ヤスエのそういう気持がよくわかっていた。

泣き兎になれといったヤスエが、深夜に火鉢の上に俯いて、火箸を握り締めて、灰になにか文字らしいものを書きながら、泣いているのを麦子は見た記憶がある。どこか辺鄙な北陸の宿だった気がする。深夜に、頻りと水洟をすすりあげる音がするので、眼醒めて見ると、ヤスエは泣いていた。

「畜生……畜生……なんてこった、畜生……」

ヤスエは、蓮っ葉な語調でいって、火箸で灰を掻きまわし、最後には二本の火箸を束にして、深く突き立てた。横座りになったヤスエの膝小僧のあたりに、空の徳利が転がっているのが見えた。麦子が眠ったのを見届けて飲んだのだろう。麦子は見てはいけないものを見た感じがして、目蓋を強く閉じた。ヤスエの横顔は厳しかった。仄暗く照らし出された中で、いつまでも能面のように動かなかった。後年、麦子が航空会社の日本観光案内のパンフレットの中で見た能面のひとつが、ヤスエの厳しい表情と同じだった。その面は、若い狂った女を表現する十寸髪だと解説が入っていた。髪は顎まであった。

ヤスエの顔は、他人を騙している時は、浮世絵の花魁のような感じだが、一人になって過去を思い泛かべて歯噛みしている時は、能面の十寸髪の顔だと思った。女には、この二面があるのだと麦子は幼い胸で知った。

祭礼のサクラをやり、夜店で手伝いをやっていたヤスエは、もっと手っ取り早く金を得たいがた

めに、寸借詐欺を重ね、その挙句、新しい犯罪を思いついた。
学校荒しである。といっても、深夜に学校に忍び込んで金目の物を盗むといったものではなく、白昼に、堂々と小学校や中学校の教員室に乗り込んだ。幼い麦子の手をしっかり握って、出鱈目な名前を口にした。
「三年の小田の祖母でございますが、転校手続きは、どのようにすればよろしいのでしょうか。両親は離婚が成立いたしまして……」
こういったことを教員室にいる空き時間の教員に一気にまくしたてるのだ。
急に転校手続きといわれた教員は慌てて、教頭に相談するといって席を立つ者もあれば、手続きの方法を懇切丁寧に教えてくれるのもいた。ヤスエは、その隙に、ハンドバッグなど素早く掠め盗った。これは、面白いように成功した。
防府でもやったし、神戸でもやり、佐賀の小学校でもやった。
麦子は、ヤスエが詐話を演じている間、いつも、ぼんやりと窓の外の景色を眺めているような表情をしていた。そうすることが、大人たちに怪しまれず、おかあちゃんの仕事を助ける唯一の道だと思い込んでいた。
防府の中学校の窓からは、禿山が見え、神戸の小学校の窓からは六甲の山脈が見え、佐賀の小学校の場合は、霞んだ平野の彼方に背振の連山が望まれた。
「先生、お忙しいところ、ありがとうございました」
ヤスエが一際高い声で礼をいう。これが麦子に対しての合図である。ハンドバッグとか財布を盗んだヤスエは、麦子の手首を鷲掴みにして、ぐいぐいと引き、一刻も早く現場から逃げようとした

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com